

多人数会話での他者選択の技法における注意要求の尺度

劉萌(北海道大学大学院生)

1. はじめに

会話分析では、順番交替組織 (turn-taking organization) が日常会話の最も基本的な組織の1つだとされている。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974)によれば、順番の割り当て技法の1つである他者選択、すなわち現話者が次話者を選択する技法は、ほかの技法より優先されている。さらに、他者選択する際に、様々な技法が用いられる。しかし、具体的にどのような技法が用いられるか、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) はそれらの技法を羅列するだけで、具体的な分析を行わなかった。その後の研究は、個々の他者選択の技法に注目し、その詳細を記述する研究が活発に行われており (中井 2003 ; Lerner 2003 ; 榎本・伝 2003 ; Rossano 2013 ; 安井 2017), 会話においてどのような手段で他者選択がなされるのかが明らかにされつつある。

明らかにされた他者選択の技法を大別すると、3種類に分けられる。1つ目は言語行動である。例えば、名前を呼ぶなどの宛先表現 (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974), 丁寧体/非丁寧体の利用 (高梨 2018) が挙げられる。2つ目は非言語行動である。例えば、指さし (串田・平本・林 2017) や視線行動 (榎本・伝 2003 ; 中井 2003 ; Lerner 2003 ; 串田・平本・林 2017) である。3つ目は発話内容に関わるものである。例えば、成員カテゴリーの利用 (Sacks 1972), FPP(第一成分)の利用 (Sacks, Schegloff & Jefferson 1974), 情報要求や同意要求の使用 (中井 2003), 共有知識への言及 (高梨 2018) が挙げられる。

以上のような他者選択の技法に注目する先行研究は、他者選択の技法を包括的にまとめた研究と、それらの技法の中から1つを取り上げ細かな分析を行う研究の2つに大別される。しかし、それらの研究は、2つの問題点がある。1つ目は、他者選択の手段となりうる技法の羅列にとどまったり、同時に使われている複数の技法を切り離して分析を行ったりすることが多く、技法と技法間の関連性について言及していない。しかし、実際の相互行為である会話において会話参加者によって産出される言語行動や非言語行動は、それぞれ単独に働くのではなく、参加者たちが従事する活動、連鎖や順番においてそれらが産出される位置や順番との関係の中で、統合され、一貫した行為を共に構成するものということが指摘されている (安井 2017)。他者選択においても、それは同様である。Lerner (2003) および串田・平本・林 (2017) によれば、他者選択において、ただ一つの技法で次話者を選択することは難しく、複数の技法の組み合わせが必要である。以上の指摘から、他者選択は、複数の技法を用いて行われるものであること、それらの技法は互いに補完し合い、次話者の選択を達成していることが分かる。したがって、他者選択の分析においては、そこに現れる複数の技法の働きを統合的に分析する必要があると考えられる。2つ目は、現話者が技法を用いる際、そこに様々な調整が加えられるということも意識する必要がある。例えば、視線行動についていうなら、現話者は、発話の間選択した相手に視線を向け続けることもあれば、時々しか視線を向けないこともある。後者の場合、発話のどの時点で視線を向けるのかという問題も生じる。これらの行動の違いにより、視線行動がもたらす選択された者への働きかけの強弱は変化すると筆者は考える。

加藤 (2014) は現話者が発した文の形式によって、TRPの強弱が生じ、その結果、参加者に対する順番交替要求の度合いが変化する主張している。本稿では、以上の2つの不足点を補い、他者選択の実際を明らかにするため、加藤 (2014) のTRPの強弱という概念を他者選択の技法の分析に導入する。具体的には、他者選択では、現話者が選択する技法の組み合わせ、さらにそこに加えられる調整のあり方によって、選択された者に対する注意要求を強めたり弱めたりすることができる。

2. データについて

本稿では、中国語母語話者の自発的な発話場面と日本語母語話者の自発的な発話場面を共に分析対象とする。2つのデータは中国と日本のある大学の教室で、参加者が机を囲んで会話する場면을録音・録画したものである。事前に、会話参加者に、話題の制限はないので自由に話してほしいと伝えた。

3. 分析と結果

これまで論じてきた通り、現話者が選択した技法の組み合わせ、さらにそこに加えられる調整のあり方によって、選択された者に対する注意要求の度合いの強弱は変化しうる。この強弱の変化は、次話者の行動およびその後の連鎖の展開に強く影響を与える。データから見れば、他者選択の場面で、選択された者が発話権を取る場面もあれば、選択されていない者が発話権を取る場面もある。さらに、選択されていない者が発話権を取る場合、トラブルが生じた場面もあれば、トラブルが生じない場面もある。これからはその後の連鎖の展開に注目しながら、分析を行いたい。

3.1 次話者として選択された者が発話権を取る場面

現話者が他者選択の技法を行使し、次話者を選択したなら、選択された者が次の順番を取ることが一般的である。しかし、現話者が選択した技法の組み合わせ、さらにそこに加えられる調整のあり方によって、選択された者に対する注意要求の度合いの強弱は異なる事例が見られる。具体的に、2つの事例から説明できる。

事例1は、現話者が非言語行動と発話内容に関わる技法を用いて、しかもそれらがすべて同一の者を指していた事例である。

それに対し、事例2は、現話者が事例1と同じ、非言語行動と発話内容に関わる技法を行使した事例だが、発話の間中、TRPにおいて選択されていない者に対して手をさす、視線を向けるという非言語行動もあった。それらの非言語行動は他者選択の技法に加えた調整だと考える。事例1と比べると、事例2では、それらの調整が選択された者に対する注意要求を弱め、会話に選択されていない者が入る余地を残したと言えるであろう。まとめると、事例1は注意要求が比較的強い場面で、事例2は技法に調整が加えられたことによって、注意要求が比較的弱い場面である。

事例1と事例2で、現話者が行使した他者選択の技法とそれらの技法に加えられた調整を表1のようにまとめる。

表1：選択された者が発話権を取る場面

事例	注意要求の強弱	他者選択の技法	技法に加えられた調整
事例1	比較的注意要求が強い	2：視線行動、指さし 3：成員カテゴリーの利用	
事例2	比較的注意要求が弱い	2：視線行動、手さし 3：PPPの利用	TRPにおいて選択されていない者に対して手をさす、視線を向けるという非言語行動

3.2 次話者として選択されていない者が発話権を取る場面

次に、現話者が技法の組み合わせによって、他者選択をしたが、選択されていない者が発話権を取ってしまった3つの場面を説明する。これらの場面を見ると、いずれも選択されていない者が発話権を取ったが、注意要求が弱い場合は順番交替のトラブルが生じるのに対し、注意要求が比較的弱い場合はトラブルが生じない。

事例3は、現話者が非言語行動と発話内容に関わる技法を用いて、同一の者を指し、その者を次話者として選択した事例である。これは事例1と同じ、選択された者に対する注意要求が強い場面である。そして、現話者が選択されていない者が発話権を取ると、次の連鎖で、選択した者と発話した者の視線行動は、合わなかったというトラブルが生じた。

事例4は、現話者は言語行動、非言語行動、発話内容の利用この3つの種類の技法を行使し、次話者を選択した事例であるが、選択されていない者が発話権を取り、トラブルが生じず話が進んだ。ここの、トラブルが生じない理由として、筆者は現話者の非言語行動に以下のような調整が加えられたからだと考える。まずは、現話者は視線行動によって次話者を選択したが、発話の間中、選択された者を見続けず、頻繁に他の参加者にも視線を向けた。ここの視線行動の調整は、選択された者への注意要求を弱めると考えられる。このように、視線を選択された者以外に向けることで、選択された者への注意要求が弱まる可能性については、事例2でも指摘した。次に、現話者は発話間中、体を選択された者のほうへ向け続けたが、TRPが訪れる前に体を正面に戻し、かつ、選択されていない者に視線を当てた。ここで、現話者は身体姿勢に加えた調整は、選択された者に対する注意要求の度合いを弱めていると考えられる。この2つの調整によって、選択された者に求める注意が弱まり、選択されていない者が発話権を取っても、トラブルが生じる会話が進むと考えられる。

事例4と同じ現象のもう1つの事例もあった。事例5で、現話者は、言語行動、非言語行動、発話内容の利用この3つの種類の技法を行使し、次話者を選択したが、TRPにおいて選択された者から視線を逸らし、体全体を正面に戻すという非言語

¹先述のように、現話者は他者選択の際、1.言語行動、2.非言語行動、3.発話内容という3種類の技法を用いることができる。本稿の表の「他者選択の技法」という欄には、それぞれの事例で用いられた技法をこの3種類に分けて番号を振って記載した。

行動があった。それらの非言語行動は他者選択の技法に加えられた調整で、事例4と同じく選択された者に対する注意要求が弱まった。そして、選択されていない者が発話権を取っても、トラブルが生じる会話が進んだ。

以上の3つの事例で、現話者が行使した他者選択の技法と技法に加えられた調整を表2のようにまとめた。

表2：選択されていない者が発話権を取る場面

事例	注意要求の強弱	他者選択の技法	技法に加えられた調整
事例3	比較的注意要求が強い	2：視線行動, 身体姿勢 3：FPPの利用	
事例4	比較的注意要求が弱い	1：宛先表現 2：視線行動, 手さし, 身体姿勢 3：FPPの利用, 成員カテゴリーの利用	他の会話参加者らを見るという非言語行動 TRPにおいて体を選択された者から正面に戻すという非言語行動
事例5	比較的注意要求が弱い	1：宛先表現 2：視線行動, 手の動き, 身体姿勢 3：FPPの利用	TRPにおいて他の会話参加者らを見るという非言語行動 TRPにおいて体を選択された者から正面に戻すという非言語行動

以上で、3.1節と3.2節の内容から、言語行動、非言語行動、発話内容に関わるものこの3種類の他者選択の技法は他者選択の場面で共起しうることがわかった。このように3種類の異なる複数の技法が組み合わせられ、しかもそれらの技法がすべて同一の者を指していた場合、選択された者に対する注意要求が強くなりうる。ただし、この3種類の技法が同一の者を指していたとしても、視線行動や手さしや身体姿勢の変化などの非言語行動に調整が加えられることで、選択された者に対する注意要求は弱まりうる。特に、TRPにおける非言語行動の調整は、他者選択の強弱に大きな影響を与えられうる。

3.3 注意要求の強い他者選択から注意要求の弱い他者選択への切り替え場面

上記の事例以外に、データを分析する際に、中国語データから、1つの会話の中で、注意要求の強い他者選択から弱い他者選択への切り替えが生じる事例も2つあった。事例6と事例7は一続きの会話であり、会話の冒頭で、現話者は発話権を、会話参加者の中の特定の1人ではなく、2人の会話参加者に割り当てた。その後、発話権を割り当てられた2人のうちのもう1人に向け、再度他者選択の技法を用いて発話を促す。この2つの事例とも、1回目の他者選択では、現話者が種類の技法の組み合わせで、選択された2人の会話参加者に強い注意を求めた。そして、割り当てられた2名のうちの1人が発話権を取った。これに対し、2回目の他者選択は、明らかに注意要求の度合いが弱まっている。割り当てられた1人が発話し終わると、選択者は視線行動のみで、もう1人の発話を促し、次話者として選択した。しかし、発話を促したにもかかわらず、次の位置で、全ての会話参加者が現話者の視線行動に気づかなかったことで、重なりというトラブルが生じた。

以上の2つの事例で、現話者が行使した他者選択の技法と技法に加えられた調整を表3のようにまとめた。

表3：注意要求の強い他者選択から弱い他者選択への切り替えの場面

事例	注意要求の強弱	他者選択の技法	技法に加えられた調整
事例6	比較的注意要求が強い	1：宛先表現 2：視線行動 3：FPPの利用；成員カテゴリーの利用	
	比較的注意要求が弱い	2：視線行動	
事例7	比較的注意要求が強い	1：宛先表現 2：視線行動, 身体姿勢 3：FPPの利用；成員カテゴリーの利用	
	比較的注意要求が弱い	2：視線行動	

以上をまとめると、2度の他者選択は、注意要求という点において明確なコントラストを示している。まず、1回目の選択行為が複数の技法の組み合わせであり、2回目の選択行為は視線行動のみであった。その結果、2回目の選択の後、重なりというトラブルが生じた。ここから、技法の数が明らかに減ったこと、さらに会話参加者全員が確実に気づけるわけではない視線行動を行使したことによって、選択された者に対する注意要求は明らかに弱まったと考えられる。

現話者が2回目の他者選択で視線行動のみを用い、注意要求の度合いを弱めたのは、1回目の他者選択で既に強い注意要求が行われていたためであると筆者は考える。一連の会話の中で、現話者は、一度強い技法を用いて選択した相手に対し、もう一度同程度の強さの技法を再度用いる必要はないと判断したのではないか。

以上の7つの事例で、現話者が行使した他者選択の技法の関連性をみると、まず、FPPの利用という技法は、必ず他の技法と組み合わせるといった関連性があることである。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) が指摘しているように、「FPP+ α ²」の他者選択の技法がよくみられる。次に、7つの事例すべてで現話者が他者選択する際に視線行動を行使していたことは、先行研究が指摘する視線行動の重要性を裏付けるものである。ただし、事例6と事例7からわかるように、視線行動のみによる他者選択は失敗するリスクが高い。ここから、視線行動は他者選択において基本的で重要な技法であるものの、それは他の技法を補う技法であり、他者選択を確実に成功させるためには、他の技法と組み合わせるべきだということがわかった。

技法に加えられた調整のところをみると、このような調整は、全て非言語行動に対して加えられている。さらに、非言語行動に調整が加えられたすべての事例において、現話者は選択されていない者を見るという視線行動をとっていた。ここから、他の技法と比べて、視線行動が最も調整が加えやすいということがわかる。かつ、上で述べた非言語行動の調整は、多くの場合、TRPが訪れた時点で行われるということである。このことから、TRPが訪れたまさにその時点での非言語行動の調整は、選択された者に対する注意要求を弱めうると考えられる。

4. おわりに

本研究では、加藤(2014)が文形式の分析をもとに提示したTRPの強弱および注意要求という概念を拡張し、先行研究でこれまで十分に論じられてこなかった他者選択の技法間の関連性およびそこに加えられる調整を詳細に分析してきた。この注意要求の強弱の度合いという観点から、実際の他者選択の場面を観察し、3種類の技法を分析することで、技法と技法との関連性、および現話者による技法の組み合わせとそれらの技法に加えた調整によって、選択された者に対する注意要求の強弱の度合いが変化することが明らかになった。これは、会話分析の基本的な研究主題である他者選択の全体像を明らかにすることにつながると考えられる。

参考文献

- 榎本美香・伝康晴(2003). 3人会話における参与役割の交替に関わる非言語行動の分析 言語・音声理解と対話処理研究会, **38**, 25-30.
- 加藤重広(2014). 日本語の語用特性と複文の単文化益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・丸山岳彦(編) ひつじ書房 pp. 495-520.
- 串田秀也・平本毅・林誠(2017). 会話分析入門 勁草書房
- Lerner, G. H. (2003).
Selecting next speaker: The context-sensitive operation of a context-free organization, *Language in Society*, **32**, 177-201.
- 中井陽子(2003). 言語・非言語行動によるターンの受け継ぎの表示 早稲田大学日本語教育研究, **3**, 23-39.
- Rossano, F. (2013).
Gaze in conversation. in *The Handbook of Conversation Analysis*, eds J. Sidnell and T. Stivers. Malden, MA: Wiley-Blackwell, 308-329.
- Sacks, H. (1972).
An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. in *Studies in social interaction*, eds D. Sudnow. New York, NY: Free Press. 31-74.
- Sacks, H. Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974).
A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, **50**(4), 696-735.
- 高梨克也(2018). 基礎から分かる会話コミュニケーションの分析法 ナカニシヤ出版
- 安井永子(2017). 直前の話し手を指さすこと—直前の発話との関連を示す資源としての指さし— 社会言語科学, **20** (1) 131-145.

² α は他の他者選択の技法を指す。